『浜松中納言物語』書誌点描
――清水浜臣本書入・「貫之もの語」など――

Bibliographical Considerations of *Hamamatsu Chunagon Monogatari*

赤迫　照子

Shoko AKASAKO

はじめに

約十年間、『浜松中納言物語』伝本を調査し、焼失・所在不明・新写本も含めて、現在までに六六点を知り得た。江戸時代以前の古写本には出会えていないが、江戸中期から末期の写本については色々と明らかになってきた。本稿では調査結果の中から、一 宮内庁書陵部蔵清水浜臣旧蔵本の書入翻刻、二 東京大学文学部国語学教室本書誌、三 諸本書誌の報告を記す。

清水浜臣旧蔵本の書入は大阪府立中之島図書館不忍文庫旧蔵本・早稲田大学図書館九曜文庫本・京都大学文学研究科図書館岡本保孝書入本等に転写され、和学者達に『浜松中納言物語』の注釈として受容されたが、未だ詳しい検討はされていない。江戸時代における注釈の受容の様相を考察するために、まずは基礎資料編として書入の翻刻を掲載する。

東京大学文学部国語学教室蔵本は「貫之もの語」という奇妙な内題を有する。『国書総目録』や国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースに記載はあるが、詳細な書誌は未報告であった。

諸本書誌の報告は、これまでの科研成果報告書[1]で触れた事柄も含める。

小松茂美氏『校本浜松中納言物語』（二玄社　昭39）から半世紀以上が経過した。新出本や所蔵機関変更等、現状に即した情報の再整理が必要である。取り急ぎ、本稿の情報を以て日本古典籍総合目録データベースを補完できればと思う。

一、宮内庁書陵部蔵清水浜臣旧蔵本の書入

書誌は、小松氏『校本』「諸本解説」E系統の五二頁に以下のようにある。

①四巻四冊本を二冊本に改装。ただし、第二冊は巻四の方が上に綴じ誤っている。②袋綴。楮紙の厚様の表紙の左肩上に、打ちつけ書きにてそれぞれ「濱松物語上・下」と記す。本文と同筆。③内題は、それぞれ「濱松中納言物語一・二・三・四」とある。④一面十行。⑤丁数は、巻一―六二、巻二―四七、巻三―五三、巻四―五七丁。⑥書き入れは墨と朱筆を交じえ、諸所に見える。なお、朱筆にて濁点、圏点、傍線を記し、さらに地名、人名などを注記している。また、巻頭の遊紙に、『風葉集』、『拾遺百番歌合』、『続後撰和歌集』などの浜松中納言物語和歌を援用抄書している。さらに、「濱按此書はしめのうた一二冊闕しと見えたり四巻の末もいかならんとあるは小説の巻末に……」という考証を掲げ、この物語の首・末巻の欠脱を指摘する卓見を示している。奥書はない。⑦巻頭の遊紙に「清水濱臣蔵書」の長方印がある。なお、巻二以下は各巻に「泊洒舎蔵」の長方印が押捺されている。後者は、清水浜臣（一七七六―一八二四）所用の蔵書印であることというまでもない。

二〇一九年一月九日（受理）

赤迫　照子　　宇部工業高等専門学校一般科准教授

閲覧したところ、綴じ誤りは直されていた。遊紙にはびっしりと文字が書き込まれている。遊紙裏冒頭の1～6行目「この物語のうちに…よそにのみみつの濱松としをへてつれなき色にかゝる浪かな」について、小松氏は「これはこの物語の題名考証ともいうべき記載で、清水浜臣旧蔵本などに別筆で書かれ、少くとも浜臣以前は通行の説であったらしい」（「諸本解説」五四頁）と指摘されている。「別筆」とあるが、これは本文および本文書入と同じ浜臣の筆で、7行目「更科日記巻末に云」までが浜臣筆に見える。そしてこれら以外の遊紙表裏の抄書は、筆が異なるように見える。

浜臣・伊藤光中・岩下貞融の書入を転写した早稲田大学図書館九曜文庫本は、墨付一丁表の右上欄に「濱臣　朱　光中　墨青　貞融　黄」と色分けの区別を記している。その九曜文庫本の遊紙表では前掲の「この物語のうちに…よそにのみつの濱松年をへてつれなき色にかゝる浪かな」箇所を朱書にするだけで、「濱按此書はしめのかた一二冊闕しと見えたり」を含む浜臣旧蔵本遊紙の転写箇所は、墨書なのである。九曜文庫本の記す色分け区別を素直に信じれば、遊紙墨書は伊藤光中による書入の写しということになる。気になる点が多々あるが、浜臣旧蔵本における朱墨の別の問題も含め、筆跡の考察は不十分なので、今、言及はここまでに止めておきたい。

【凡例】

一、翻刻本文は底本の姿を尊重したが、通行の字体を用いた。朱による濁点もそのまま付した。

一、本文書入は、上下余白や本文左右傍に存する。本文の左右傍書の場合はできるだけ原態を示せるように努めた。

一、見せ消ちは「―」で、■は墨塗箇所を示す。不読箇所は□で示した。

一、遊紙は全て翻刻した。

一、本文書入は、考証・典拠・家集収載の注記を掲げた。繁雑になるため、地名・人名等を漢字表記にした程度のものは掲出しなかった。ただし、和歌の詠者の傍書はその初句と共に掲出した。

一、本文書入は、「　」の通し番号に続いて施注本文・丁数・行数を記す。…以降には小学館新編日本古典文学全集の頁数・行数を記す。次の○には書入本文を記す。基本的に上下左右の余白欄に存するものであるが、一部、編集の都合上、左右傍書もここに掲げた。書入に典拠がある場合は…に続けて引用した。

一、↓に続いて引用するのは、『風葉和歌集』か『物語二百番歌合』後百番歌合収載和歌である。繁雑なので歌集名は省略した。『物語二百番歌合』の『浜松』和歌は全て右方である。

一、本文書入の「上文」は既出の、「下文」はその箇所以降の『浜松』本文で引用されたことを示す。小学館新編日本古典文学全集の該当箇所を掲げておいた。「文詞」は消息文であることを示す。

［遊紙表］

△この世の外になりなはあはれと思ひなんやと申侍り侍り給人に　濱松の左大将の娘
　けふりけん人をたれともしらぬたに夕への雲はあはれならすや

風葉集十六　人をゆくへしらすなしてなけき侍りける頃尾花の風になひくを見て　濱松の中納言
　たつぬへきかたしなけれは故里の尾花か袖にまかせてそ見る

同十八　中納言のもとに暁たちよりてけるにいみしくとふとく経をよみすましてゐあかしつるに
　やと見えけれはよめる　濱松の宰相中将
ひとりしもあかさしと思ふ床の浦に思ひもかけぬ浪のおとかな
　山里に侍りけるにかへりてかしこなる女のもとにつかはしける
あかつきは袖のみぬれし山里にねさめいかにと思ひやる哉

同十七　何となく見なれ侍ける女をゆくへしらすなし侍りける所にて　濱松の中納言
　おもひ出る■人しもあらし古里に心をやりてすめる月哉

濱按以下九巻今本濱松になし　□れにておもふに一巻のはしめ闕巻
　いちしるし

△拾遺百番哥合　左源氏　右御津濱松　常陸介孝標女作　十五首
　此のうち十二首は本文ニ哥アレハ校合シタリ　三首ハ本文ニナシ　一巻ノ末二巻ノ始ニアリシナルヘシ　廿九番　右　渡唐の舟にのるとて都人に　歟　中納言
　かきくらすなみたは袖にさわきつゝもろこし舟はけふそのりぬる
卅番　右　中納言唐にわたりて後さま〳〵思ひくたけて　大将姫君
　うしとだに思ひ出しとしのへともなほあまのとをあけかたの月
卅三番　右　日本中納言の別をしたひて此国までおくり来てかへりわたる日　大唐国宰相
　あふこなき雲のきはめをへたてにていつともあらし君をこふらく

［遊紙裏］

この物語のうちに
　ひのもとのみつの濱松こよひこそ我をこふらしいめに見えつれ
この歌をもて物語の名とせりこれはもと万葉集の歌もて
よめるなり

「續後撰集十二恋　寄松恋　左衛門督通成
　よそにのみみつの濱松としをへてつれなき色にかゝる浪かな」

更科日記巻末に云

濱按此書はしめのかた一二冊闕しと見えたり　四巻の末もいかならんとそとあるは小説の巻末に聴下回分解といふに同し　されは末猶有しなるへし　はしめの闕しといふよしは風葉集巻八もろこしにわたるとて道より女のもとにつかはしける　濱松中納言
かさねけんことそくやしきから衣袖のみぬるゝつまと也けり

返し　山の僧正のはゝ
から衣立はなれなば我のみそうらむる袖もくちはてぬへき
中納言もろこしへ思立侍とていとまきこえけるに月いとあかかりければ　濱松の東宮
いかはかり涙にくれて思ひ出ん西にかたふく月を見つゝも
返し　中納言
ふるさとのみかさの山を思ひ出て我もいかゝは月を見るへき

【本文書入】

巻一

[1]思ふかたの風　一オ3…三一3
○躬恒集下　浪たゝはおきの玉もゝより来へく思ふかたより風もふかなん
…『躬恒集』下・三二六「浪たゝはおきの玉もゝよりくへくおもふかたより風もふかなん」(2)
[2]石山のをりのあふみのうみ思ひ出られて　一オ7…三一7
○濱(茶)按此石山のことはしめに有し事也　闕巻の所也
[3]さうはみち(遠路)ほしくもせんり(千里)(雲)　一ウ3…三二3
○朗詠集橘道幹石山寺ニテ作レル詩也…『和漢朗詠集』下・行旅・六四六・
橘直幹「蒼波路遠雲千里　白霧山深鳥一声」(3)
[4]からくにといふ物語　二オ5…三二15
○唐国といふ物語狭衣にも見ゆ…『狭衣物語』巻二・二七七頁「唐国の中納
言のやうに、子持ち聖やまうけん」(4)
[5]承願殿といふ所に　二ウ6…三三11
○此文唐の代の事にあてゝかけりと見ゆさらは貞観殿の誤なるへし
※同じ書入が二ウ10行目左余白にもあるが、線で抹消されている。
[6]おく露もきり立空も鹿の音も雲井のかりもかはらさりけり(風葉離別)　五オ10…三
七10
→巻第八・羈旅・中納言・五九九「おく露も霧たつそらもしかのねも雲ゐの
空もかはりやはする(りやはする風)」(5)
[7]中すこしもりたる心地して　七オ6…四〇4
○今俗ニイフ中高(盛)ナル顔サマ也
[8]三ば四の殿つくりして　十一オ5…四五11
○この殿はむべもとみけりさき草の三は四はに殿作して…催馬楽「此殿」「三
枝の三つば四つばの中に殿づくりせりや殿づくりせりや」(6)
[9]とりとならば　一二オ5…四七1
○長恨歌…『長恨歌』第一一七・一一八句「在天願作比翼鳥　在地願為連理
枝」(7)
[10]たれにより涙の海に身をしづめしほ(た)○るゝあまとなりぬとかしる　一五
ウ9…五二15
→二十一番・二四二詞書・中納言「渡唐の後たびねのゆめにひのもとの大将
の姫君、たれによりなみだのうみに身をしづめしほたるるあまとなり
ぬとかしる、と見えければ」
[11]ひの本のみつの濱(物語百番歌合)(風葉離別)(風　物語歌合同)
…五三8
→巻第八・羈旅・五九八・中納言「日の本のみつのはままつ今夜こそ夢にみ
えつれ我を恋ふらし」、『物語二百番歌合』二十一番右・二四二
○万葉集第五　山上憶良　大伴御津松原可吉掃弖和礼立待連帰坐勢(オホトモノミツノマツハラカキワケテワレタチマタンハヤカヘリマセ)…『万
葉集』雑歌・山上憶良・八九九「大伴御津松原可吉掃弓和礼立待速帰坐勢」
[12]はるやむかしの(月やあらぬ春やむかしの)(業平朝臣)　一六ウ7…五四7
…『古今集』恋歌五・七四七・在原業平朝臣「月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして」
[13]うめの木のかぎりあると聞く山　一六ウ9…五四9
○大庾嶺…江南省の五嶺山脈の一つ。唐の張九齢（六七三―七四〇）が険しい道
を切り開き梅を植えて以来、梅の名所となった。日本でも『和漢朗詠集』
上・春梅・九一・菅原文時「五嶺蒼蒼雲往来　但憐大庾万株梅」、上・春
柳・一〇五・大江維時「大庾嶺之梅早落　誰問粉粧」と詠まれる。
[14]月影のうかへるみつはくむ(水汲)までにあはれいくよをながめ来ぬらん　二五
オ3…六七8
○としふれ(後撰)はわかくろかみも白川のみつはくむ迄おいにけるかな…『後撰集』
雑三・一二一九・檜垣嫗(桧垣嫗)「年ふればわがくろかみもしら河のみづはぐむま
で老いにけるかな」
[15]つらつゑをつきて月をつくゝ(ことしけき心より咲物おもひの花の枝をはつら杖につく)(貫之)とながめいで　二五ウ1…六八8
…『貫之集』八二四「ことしけき心よりさく物思ひの花の枝をはつらつえに
つく」
[16]うしと思ひあはれと思ひしらさりし雲井の外のひとのちぎりを(物語百番歌合)(ふ歌合)(ふ歌合)(は下文に歌合)
二七ウ2…七一6
→二十二番・二四四・河陽県の后「うしとおもふあはれと思ふしらざりしく
もゐのほかの人のちぎりを」
[17]あらかりしおほくのなみにそぼち来てこひの山路にまかふころかな(物語百番歌合)(つゝ歌合)(とひぬる歌合)
二九オ6…七四1
→二十三番・二四六・中納言「あらかりしおほくのなみにそほちきてこひの
やまぢにまどひぬるかな」

[18]よろづ(を)とりくび(首)たれて(垂)　三四オ8…八一13
○よろつをとりは大臣后なとのけしき心をとりてそむかしとし給ふ也
[19]〈天にあらば(比翼)ひよくの鳥となり地にあらば(連理)れんりの枝とならん　三四ウ2…八二3
○長恨哥…[9]に同じ
[20]〈雲井の外の人の契は(を上文)　三五オ5…八三2
○上文　うしと思ひあはれと思ひしらさりし…憂しと思ふあはれと思ふ知らざりし雲居のほかの人の契りを（巻一・七一）
[21]身(世歌合)のうさにし(不芝折而)をらでいりしおく山になるとて人のたづね来つらん　物語百番歌合
三六ウ3…八五3
→二十四番・二四八・河陽県の后「世のうさにしをらでいりしおく山になにとて人のたづねきつらむ」
[22]あさぎりの峯にもをねも立こめて帰らんかたもえこそそられね　三七ウ10…八七3　源氏物語夕霧の大将小野にいまして山里のあはれをこむる夕霧に立いでん空もなき心地して
…『源氏物語』夕霧・五二六・夕霧「山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して」(8)
[23]あはれしる人社さらになかりけれいまはと思ふあきの夕を　四八オ5　物語百番歌合
…一〇二6
→二十五番・二五〇・中納言「あはれしる人こそさらになかりけれいまはとおもふ秋のゆふべを」
[24]〈人のとふまで　五三ウ10…一一〇10
…『拾遺集』恋一・六二二・平兼盛「しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」、『天徳内裏歌合』恋・二十番・四一　忍ふれど色に出にけり　風葉秋上
[25]いまやとふけふや見ゆると待つゝもおなじ世にこそなぐさめてふれ　五九オ8…一一九3　物語百番歌合
→二十六番・二五二・一の大臣の五の君「いまやとふけふや見ゆるとまちつつもおなじ世にこそなぐさみてふれ」
[26]わかるべき後のなげきを思はずはまたれましやはあさなゆふなに　五九ウ3…一一九9　物語百番歌合
→二十七番・二五四・中納言「わかるべきのちのなげきを思はずはまたれましやはあさなゆふなに」
[27]かたみぞとくるゝ夜毎にながめてもなぐさまめやはなかばなる月　六一オ3…一二一13　物語百番歌合
→二十八番・二五六・大臣の五の君「かたみぞとくるる夜ごとにながめてもなぐさまめやはなかばなる月」

巻二

[28]此(文詞)のほどたひらかにものせさせたまふにや　六三オ3…一二六12
[29]たゞせう〳〵のよのもどきそしられ　六六オ8…一三一12
○召〳〵　少〃なるへし　但少将にて上文の少将のめのとをいふか
[30]〈やまなしの花のこゝろうきをおぼしいるに　六七ウ3…一三三9　世の中をうしといひてもいつくにか身をはかくさん山なしの花　木のもとは雪とふるまでとふ人のなくてやつひに山なしの花
…『古今和歌六帖』第六・四二六八・よみ人しらず「世の中を憂しといひてもいづこにか身をば隠さん山梨の花」
…『草庵和歌集』春歌上・御子左入道大納言家旬十首　梨花・一一八「木のもとは雪と降るまでとふ人のなくてやつひにやまなしの花」
○源氏物語にも山なしの花そのかれんかたなかりけるとあり…『源氏物語』総角・二四七頁「山なしの花ぞのがれむ方なかりける」
[31]〈忍草もつみいでけるよ　七一ウ1…一三九8
○のこしおくかたみの子たになかりせはなにゝしのふの草はつまゝし…『源氏釈』七七「むすびおくかたみのこだになかりせばなにに忍の草をつまし」、同歌は『奥入』『紫明抄』『河海抄』にもあり
[32]まくらよりあとよりこひのせめくるここちして　七一ウ9…一四〇2
○枕よりあとより恋のせめくれはせんかたなみそとこなかにをる…『古今集』雑体・一〇二三・読人しらず「枕よりあとより恋のせめくればせむ方なみぞ床中に居る」
[33]〈としに一夜なりとも　七二オ10…一四〇13
○契りけん心そつらきたなはたのとしに一度あふはあふかは　秋近し…『古今集』秋歌上・一七八・藤原興風「契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは」
[34]ゆくへもしらずはてもなくむなしきそらにみちぬばかり　七三オ7　古今我恋は行へもしらすはてもなし
…一四二6
…『古今集』恋二・六一一・凡河内躬恒「我が恋はゆくへも知らず果てもなし逢ふを限と思ふばかりぞ」
[35]〈のちせの山をたのめて　七五ウ9…一四六9
○わかさなる後瀬の山の後も又あはんかならすけふならすとも…『古今和歌六帖』第二・一二七二「わかさなる後せの山ののちもあはむわがおもふ人にけふならずとも」
[36]なににかはたとへてはん海のはてくものよそにて思ふおもひは　八二オ4…一五六4　物語百番歌合　歌合
→三十一番・二六二・中納言「なににかはたとへていはむうみのはてくもの

よそにておもふ思ひは」

[37]あはれいかにいづれの世にかめぐりあひてありし有明の月をながめん（物語百番歌合 は見るへき 歌合）
八二オ9…一五六9

→三十二番・二六四・中納言「あはれいかでいづれの世にかめぐりあひてありしありあけの月を見るべき」

[38]思ひたちよりにし事もたれならなくに（みちのくの忍ふもちすりたれゆゑにみたれんと思ふわれならなくに）　八三ウ4…一五八6

…『古今集』恋歌四・河原左大臣・七二四「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」

[39]心からしづくにこる別哉すまばなげかてあるべき物を（むすぶ手の雫にゝこる山の井のあかでも人に別るるかな）　八四ウ3…一五九11

…『古今集』離別歌・紀貫之・四〇四「むすぶてのしづくにごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな」

[40]御ゆかりむづひ　八五ウ6…一六一15

○源かけろふ　けにことなることなきゆかりむつひにこそあるへけれ…『源氏物語』蜻蛉・二四一頁「げにことなることなきゆかり睦びにぞあるべけれど」

[41]とりかへさまほしき（とりかへす物にもかなや）　九〇オ3…　一六八2

…『校本』使用本では、傍書を書入ではなく本文とするのは教の、浜臣旧蔵本と同じE類／乙類第四種（9）である筑波大学附属図書館本（6―4―3）のみ。

[42]わかれては雲井の月もくもりつゝかばかりすめる影も見ざりき（物語百番歌合）　九五オ9…一七五13

→三十四番・二六八・帝「わかれてはくもゐの月もくもりつつかばかりすめるかげも見ざりき」

[43]あくるもしらですぐべきなからひを（伊勢）　九九ウ6…一八二13

○玉すたれあくるもしらてねし物を夢にもみしと思ひける哉…『伊勢集』五五「たますだれあくるもしらでねしものをゆめにもみじとゆめおもひきや」

[44]むなしきそらにみちぬる心地のするまゝに（古今 我恋はむなしき空にみちぬ（し思ひやれども行方もなし））　一〇二オ10…一八六7

…『古今集』恋歌一・四八八・読人しらず「我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

[45]やう〳〵ものおもひしられ侍にしよはひより（文詞）　一〇三オ1…一八七3

[46]おはしますらんおなじよの木草ともならまほしう　一〇四ウ5…一八九10

○兼輔家集　先帝かくれさせ給ひて三条のおとゝにまたす

三条大臣　はかなくて世にへんよりは山しなの宮の木草とならまし物を

兼輔かへし　山しなの宮の木草と君ならは我もしつくにぬるはかり也

右二首後撰に出

…『兼輔集』一一七・一一八「（みかどうせたまひて又のとしの正月のついたちに、三条のおとど）　又、おとど　はかなくて世にふるよりは山しなの宮の草木とならましものを　かへし　山科のみやのくさ木と君ならば我もしづくにぬるばかりなり」、『後撰集』哀傷・一三八九・一三九〇

[47]たれとかはしり給ふべきと思ひ侍るに（文詞）　一〇六オ3…一九一10

巻三

[48]琴をそいとおもしろくしらへ給ふやうに折〳〵うけ給はへるとかたるに（古今雑下 ならへまかり時にあれたる家に女の琴ひきけるを聞てよみて入たりける 良岑宗貞 わひ人のすむへき宿と見るからになけきくはゝることのねそする）身を歎におほしたる人こそあらめ　九ウ5…二一三4

→『古今集』雑下・九八五・良岑宗貞「ならへまかりける時に、あれたる家に女の琴ひきけるをききてよみていれたりける　よしみねのむねさだ

わびびとのすむべきやどと見るなへに歎きくはることのねぞする」

[49]くち木かたの木丁のかたひら　一一オ3…二一五7

○くち木かた（文詞）　人丛丛　如此物也

[50]たちかへりもと思ひ給へりしかと　一九ウ9…二三〇10

[51]うちやすみてあすのよさふらはんとて出給ふまゝに　二四ウ3…二三七13

○源氏

[52]まだおとろきたる人もなし　二七ウ3…二四三1

[53]〳〵（文詞）いめにさえみ（目覚タル人ノコト也）たるに（え）　二九ウ9…二四七3

[54]一聲に（中納言）　二九ウ10…二四七4

[55]思ひやる（中納言 大貳本）　三一オ8…二四八13

[56]杣川に（大貳女）　三一オ1…二四九1

[57]鳥の音も（尼君）　四八オ2…二七六9

[58]みよし野の（中納言）　四八オ6…二七六13

[59]〳〵しせりの外の　四八ウ5…　二七七10

○二千里の外の誤なるへし…『和漢朗詠集』上・十五夜・白居易「三五夜中新月色　二千里外故人心」

[60]すみなるゝ（中納言）　五二オ10…二八三1

[61]おくやまの（尼君の女）　五二ウ3…二八三5

[62]から國の（中納言）　五三オ10…二八四7

巻四

[63]思ひかけぬあやしきけからひに（文詞）　六五オ4…三〇四10

[64]あやしう覚すへけれと（文詞）　六八ウ7…三一〇9

[65]み吉野ゝ（の）　七五オ1…三二〇14
→三十五番（物語百番歌合）・二七〇・吉野の姫君「みよしののゆきのなかにもすみわびぬいづれのやまをいまはたづねむ」
[66]夜の（文詞）御けしきしつ心なけなりしも　九八オ6…三五七6
[67]しなのに（信濃　女房）の給ひて　九九オ7…三五九2

二、東京大学文学部国語学研究室本書誌

巻一・二のみの二冊。二八・二×二〇・六㎝。袋綴。表紙は白に桜と川の文様を雲母刷りした上に、水辺の草木を描く。題簽は左肩に縹色の短冊形の紙片に各々「浜荼中納言物語　本・末」と記す。巻一の表紙右上に墨書で「二」と記した紙が貼付されている。内題は、巻首題「貫之もの語　かみ・上（終）」、巻尾題「貫之もの語　下（終）」。一面十行、和歌一字下げ。前遊紙各一丁、墨付丁数は巻一―八八、巻二―六六。朱書なし。見せ消ちや補入は僅かに存するが、イ本注記や考証・典拠の書入はなし。巻二の末に本文と同筆の書写奥書が存する。

此二まきは津の国にしなりなる歟
住よしの社なる御五殿に物か有しを
つてをもとめて写し侍りぬ
浪花
尾崎蔵　印 尾崎（正方）

識語は別筆で、裏表紙見返しにある。

半井氏蔵書之所譲受畢
明治六年癸酉十二月
高月氏

蔵書印は右の「尾崎」の他、各一丁表に「木村氏蔵書印」（朱文正方）「高月所蔵」（朱文正方）がある。

本文系統はC類／乙類第一種である。今回は、後に掲げたように池田利夫氏提唱の共通脱行箇所による系統判別（1）ではBCDEF／乙類第一二三四種のいずれか判断できない。4は「奉り」の目移りによる東京大学文学部国語学研究室本の脱落であろう。

巻一・七二ウ1～10行目の「よりまたいかて…御らんせしゆふへ」がその直前と重複していることから、『校本』や手持ちの写本複写と対照したところ、C類／乙類第一種の多くも同じく重複していた。それにC類／乙類第一種以外の特徴的な脱落は、東京大学文学部国語学研究室本には見られない。かつ、C類／乙類第一種特有の本文にも合致した。

新全集…なほいとせちにやるかたなきほどなり。　巻一・一一八9
東大本…なをいとせちにやるかたなみねなり　巻一・八三ウ9

ほとんどの写本は新全集に近しい本文だが、C類／乙類第一種の静嘉堂文庫松井簡治旧蔵本と広島市立図書館浅野家旧蔵本は傍線部を「やるかたなみねも」とする。

さて、これまでの拙稿と同じく池田氏に倣って共通脱行箇所を掲出する。最初に宮下清計氏校注『新註国文学叢書』（講談社　昭26　底本は丹鶴叢書本）本文を示し、脱行部分には傍線を付す。続いてその頁数・行数を記す。次の（　）内には脱行させた伝本の略号をA～F類の分類名とともに掲げる。略号は『校本』のものを使用し、底本のC類／乙類第一種の不二文庫小笠原家旧蔵本は「不」とする。○以下には東京大学文学部国語学研究室本本文を示し、（　）内に丁数・行数を記す。

巻一…8箇所

1 知らまほしきに、后、御簾をおろして入り給ひぬ。飽かずなかなかに、半なる月を　一〇二・12（B宮忍理閣歌、C松浅鶯尾荊不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
○しらすほしきになかはなる月を（一〇ウ10）
4 みつばよつばの殿造りて、据ゑ奉り給ひて、皇子をば二三日づつ通はせ奉り給ふ。一〇五・12（A琴）
○三は四はの殿つくりしてすへたてまつり給（一四ウ8）
5 眺めけむ人のやうに、この戸閉ぢられて、心細く、あるかひなき様に侍れど、　一〇九・8（B宮忍理閣歌、C松浅鶯尾荊不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
○なかめけん人のやうに侍と（一九ウ10）
12 かへりきたるに、世に馴れぬ人にはあらざんめり。誠につつむべきにこそはあらめ。　一二五・1（B宮忍理閣歌、C松浅鶯尾荊不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
○かへりきたるにつゝむへきにこそはあらめ（三九オ4）
14 なりまさるにつけても、この后の、見し人にもいとよう覚えしも見奉らほしうて、　一二八・11（B宮忍理閣歌、C松浅鶯尾荊不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
○なりまさるにつけても見たてまつらまほしうて（四三ウ9）
18 ありける事のやうにて、隠し養ふに、日に日に物を引き延ぶるやうにて、ゆゆしきまで、　一三八・4（B宮忍理閣歌、C松浅鶯尾荊不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）

○ありける事のやうにてゆゝしきまて（五五オ３）
22実にあるわざにこそと思しつづく。明後日ばかり帰り給はむとての夜、月隈もなく、　一五五・６（Ｂ宮忍理閣歌、Ｃ松浅鶯尾荊不、Ｄ居乃無春、Ｅ浜神教花千刈、Ｆ育由百狩）
○けにあるわさにこそと月くまもなく（七七ウ８）
24このついでに、忍びがたき心のうちをうち出でぬべきにもさすがにあらず、一五八・３（Ｂ宮忍理閣歌、Ｃ松浅鶯尾荊不、Ｄ居乃無春、Ｅ浜神教花千刈、Ｆ育由百狩）
○このついてにもさすかにあらす（八一ウ１）
巻二…１箇所
30つかさども、挙りて待ち喜び聞えさせたる様ども限りなし。　一七〇・２（Ｂ宮忍理閣歌、Ｃ松浅鶯尾荊不、Ｄ居乃無春、Ｅ浜神教花千刈、Ｆ育由百狩）
○つかさともかきりなし（九オ７）

ところで、池田亀鑑博士旧蔵資料である東海大学附属図書館桃園文庫に『つらゆき物語』が二点あり（桃一一・三二と桃一一・三二　後者は前者のペン写）、『桃園文庫目録』の「浜松中納言物語（含つらゆき物語）」の項に分類されている。閲覧したところ、二点とも『浜松中納言物語』ではなく、紀貫之が登場する『蟻通明神縁起』なるものであった。大阪府泉佐野市長滝にある蟻通神社の縁起である。箱には池田博士とは別筆で「つらゆきものがたり　現写　一袖（赤字で「軸」と訂正）　蟻通明神縁起。原本所在不明。成立は後醍醐天皇の頃かそれ以後（文中、唐の日本を攻めしこと仲衷天皇より後醍醐天皇まで七度あり）」と書かれた紙片が入っていた。外題・内題に題名「つらゆきものがたり」は見えない。池田亀鑑博士の入手以前に、古書店が付した書名だったのかもしれない。

唐が出てくるので、どこかの時点で『浜松中納言物語』との混同を招いたのであろうか。なお、『貫之集』には蟻通明神の前で貫之の乗る馬が苦しんだので、貫之が「かきくもりあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは」（巻第九・八三〇）と詠んで蟻通明神に奉ったとある。この説話をもとにしたのが世阿弥の謡曲「蟻通」である。『枕草子』「社は」段は貫之の説話を紹介し、続いて、日本の帝が唐の帝より難題を出されて困っていたところ、中将の活躍によって危機を脱するという説話を記す。

翻字であろうか、桃一一・三二の箱にあった池田博士のメモに「津の國住吉の浦にして出船ゆんふうに帆をあけてもろこしにこそかゝりけれ」とある。何やら思わせぶりな東京大学文学部国語学研究室本の奥書と繋げて考えてみたくもなる。しかし、結局、東京大学文学部国語学研究室本の内題「貫之もの語」が生じた原因はわからない。

三、諸本書誌

①名古屋市鶴舞中央図書館本
戦災により焼失。『国書総目録』に「鶴舞（四冊）」と記載あり。

②松平公益会本
高松藩第十二代当主の松平頼壽元伯爵家所蔵本として『校本』「諸本解説」四八頁に記載。「昭和二十年戦火に焼失」とあるが、現存。香川県立ミュージアム寄託資料。

③城戸千盾自筆本
国文学研究者で、『古事類苑』編纂に携わった関根正直氏の蔵書。正直氏の子息俊雄氏編集の『関根文庫目録』（教育出版センター　昭58）に記載がある。

浜松中納言物語　一八〇一写本四冊　「此四巻はあが鈴屋の大人のもたまへる（安永十年宣長校本）をこひかりてある人におほせてうつさせつ城戸千盾」

城戸千盾（安永七〈1778〉―弘化二〈1845〉）は本居宣長門下。この奥書によれば、宣長自筆奥書のある宣長記念館本の写しなので、Ｄ類／乙類第三種本である。現在の所蔵状況は不明。他にも、同目録には正直氏が岡本保孝自筆稿本と断じた『とりかえばや物語考証』や古写本と思しき『栄華物語』等の貴重な資料が記載されているが、やはり行方は不明。[11]

④早稲田大学図書館九曜文庫本
中野幸一氏寄贈本。『校本』「諸本解説」五二頁掲載の兵庫県立神戸高等学校蔵本。

⑤慶應義塾大学附属研究所斯道文庫本　四点
小松茂美氏旧蔵資料。蔵書印「茂美秘笈」あり。小笠原家旧蔵本（『校本』底本）・松乃や旧蔵本・残花書屋旧蔵本・渡辺千秋旧蔵本の四点は『校本』「諸本解説」に「不二文庫蔵」とある。池田利夫氏すらも、不二文庫本は未見であったらしい。

偶然、斯道文庫教授の佐々木孝浩氏から「斯道文庫に『浜松中納言物語』がある」との御教示を賜った。斯道文庫にて閲覧の機会を得て、不二文庫本を確認することができた。不二文庫本四点全て「小松茂美　センチュリ

―文化財団寄託資料」である。

ところで『校本』底本の小笠原家旧蔵本は「諸本解説」三五頁に蔵書印「笠家文庫」から「豊前の小倉藩主・小笠原家の伝来本」とあるが、印は肥前国唐津藩主小笠原家のものである。帙内側には昭和三十四年三月六日に沖森書店で購入した旨の墨書があるが、小松氏の筆であろう。

むすび

以上、「点描」と題して知り得た情報を列挙した。

このような基礎作業を積み重ねる中でつくづく思い知らされたのは、冊子目録の価値である。電子化によって、入手できる情報は飛躍的に増加したし、色々と便利になった。それでも、ガリ版刷りや限定発行の冊子目録をめくらなければ出会えない本の情報はまだまだある。冊子目録もカードも採られずに埋もれた本も、もちろんある。

できる限り、『浜松中納言物語』写本を見つけ出したいと願っている。

【注】

(1)平成25～27年度科学研究費補助金若手研究（B）研究課題番号25770085「書入を手がかりとした『浜松中納言物語』本文生成過程の研究」。

(2)『躬恒集』の引用・歌番号は『新編私家集大成』（日本文学Web図書館　古典ライブラリー）による。底本は正保版本「歌仙家集」。

(3)引用・番号は小学館新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』による。

(4)引用・頁数は小学館新編日本古典文学全集『狭衣物語』による。小学館新全集底本は深川本。流布本では「唐国の中将」とある。

(5)これ以降、和歌本文・歌番号の引用は全て『新編国歌大観』による。

(6)引用は小学館新編日本古典文学全集『神楽歌　催馬楽　梁塵秘抄　閑吟集』による。

(7)引用は岩波書店中国詩人選集『白居易』（岩波書店　昭33）による。

(8)『源氏物語』の和歌・本文共に引用・頁数は小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』による。

(9)以下、本文系統は松尾聰氏による分類（「浜松中納言物語伝本考―本文批評の方法の実例を示すための―」『学習院大学研究年報』第1号　昭29・12）と池田利夫氏による分類（「浜松中納言物語伝本系統試論」『鶴見女子大学紀要』第10号　昭42・12）を併記する。

(10)(9)に同じ。

(11)『関根文庫目録』は正直氏とその父（つまり俊雄氏には祖父にあたる）の旧蔵書目録で、『せきね文庫選集』第1期別冊1。初出は『跡見学園短期大学紀要』第5―13号（昭42・2―51・2）。「解説」によれば目録は正直氏による蔵書整理の控えを元にし、現蔵しない本も目録に掲げている。流出や譲渡等で失われた書目には＊印が付してあるが、城戸千盾自筆本は＊印なし。

謝辞

貴重な本の情報を御教示くださり、調査・撮影・複写を許可くださいました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

本稿は平成30年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究課題番号17K02439「書入をふまえた『浜松中納言物語』新校本の作成」による研究成果の一部である。